様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ２２２３５

研究課題名（和文）教育関係者の地域のことばをめぐる議論の分析―明治末から大正期の岩手県を対象に―

研究課題名（英文）Analysis of Educators' Discussions About Local Languages : Focusing on Iwate Prefecture from the End of the Meiji Era to the Taisho Era

研究代表者
小島　千裕（KOJIMA, Chihiro）

北海道大学・教育学研究院・専門研究員

研究者番号：６０８８２０６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究期間には、以下の2点の調査や分析を行った。
第一に、明治18年1月から大正12年2月まで刊行された教育雑誌『岩手学事彙報』につき、内容構成の特徴、編輯体制などをたどった。
第二に、明治末から大正期の『岩手学事彙報』における地域のことばに関する記述を掬い上げた。そして、教育関係者の地域のことばをめぐる議論の変遷を分析した。次第に標準語を目指すという傾向が強くなっていくが、子どものことばと向き合い、自己の考えが他者にしっかり伝わるよう導く様子も窺えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、教育関係者の地域のことばについての見解や取組みとその背景を検討した。教員らが何らかの矯正を主張し実践を行うとき、その背景にどのような事情や教育観があるのかに注目し、単純な方言撲滅とは異なる状況と変遷を示したことに学術的意義がある。
昨今、地域振興に方言が活用されたり、催しが行われたりしている。地域のことばの認識や教育方針について、その歴史的展開を具体的に明らかにすることは、社会的関心に応えることになると考えられる。

研究成果の概要（英文）：During this study period, I have researched the following two topics.
First, I traced the features of contents and the editorial organization of the educational magazine "Iwate Gakuji Iho," which was published from January of the Meiji Era in the year 18 to February of the Taisho Era in the year 12.
Secondly, I researched descriptions of local languages in "Iwate Gakuji Iho" from the end of the Meiji Era to the Taisho Era. Then I analyzed the evolution of educators' discussions about local languages. Gradually, the tendency toward a standard language becomes stronger as time goes by but also it can be seen that the teachers listened to the children's native dialect while guiding them so that their own thoughts could be clearly communicated to others.

研究分野：教育学

キーワード：『岩手学事彙報』　明治末から大正期　地域のことば　ことばの教育　教育史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

明治 20 年代後期、上田万年は「国語」、その具体相として「標準語」という概念を示した。明治 30 年代には、ことばの統一に向けて政策が始動し、教育界では方言撲滅が行われたと考えられてきた。

先行研究は、この時期以降、各地の教育会が調査と方言集刊行を相次いで実施していたことや、地域の国語科の話し方教授の中心課題が標準語教育であったことなど、矯正のための取組みを指摘している（安田敏朗『〈国語〉と〈方言〉のあいだ：言語構築の政治学』人文書院 1999 年、浜本純逸編著『福岡県国語教育史研究』渓水社 1980 年）。

研究代表者は、ことばの課題が大きいと目されていた東北地方のうち、地域教育雑誌の残存数が充実する岩手県を対象として、明治 30 年代における教育関係者の地域のことばをめぐる議論について論じてきた（「教育関係者のことばの認識と「国語」形成―明治 30 年代の『岩手学事彙報』にもとづいて―」全国大学国語教育学会『国語科教育』第 77 集 2015 年、「小学校教育における方言矯正をめぐる状況―明治 30 年代の岩手県を対象として―」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 126 号 2016 年）。教員ら個々人の見解に着目すると、教育会の方言調査には疑念の声も上がり、地域のことばを全面的に否定するのではなく、また、教育現場では子どものことばの実態をふまえて無理なく取り組めるような対話練習を模索するなど、一も二もなく矯正していたのではなかったことが明らかになった。しかし、対象時期が限定的であり、その後の時代の検討は課題として残されていた。

２．研究の目的

本研究の目的は、明治末から大正期の岩手県を対象として、地域の教育雑誌をもとに、教育関係者の地域のことばをめぐる議論を分析することである。具体的には、教員らが、地域のことばやその実態をどのように捉えていたのかという「ことばの認識」と、教育現場で問題となる矯正のあり方をめぐってどのような見解を示していたのかという「矯正方針・方策」を明らかにする。議論の分析を通して、いかに地域の実態と折り合いをつけながら教授するかという学校教育の本質に迫ることができ、「国語」形成の実際も浮き彫りになると考えられる。

３．研究の方法

本研究で資料とするのは、地域の教育雑誌である。『岩手学事彙報』は、九皐堂より明治 18 年 1 月創刊、明治 40 年までは月 3 回刊行された。明治 41 年 2 月からは岩手県教育会の機関誌として月 2 回の刊行となり、大正 7 年以降はおおよそ月 1 回、大正 12 年 2 月の第 1097 号が最終号である。大正 12 年 8 月には月刊雑誌『岩手教育』が新たに刊行された。

まず、明治 40 年から大正 15 年までの『岩手学事彙報』と『岩手教育』について原本を調査し、地域のことばに関する記述を掬い上げる。論説や記録といった記事の種類や記載量の多寡を問わず、発音や方言語彙、話しぶりに関する記述をもれなく探し、記事名リストを作成して時系列に整理する。

そして、収集した記事をもとに、「ことばの認識」と「矯正方針・方策」について、その背後にある事情や教育観に注目して検討する。岩手県では明治 30 年代に続き、明治末から大正期においても、地域のことばが課題となり続ける。大正期には、小学校教員協議会の発足などを機に教授法研究が進み、児童中心の新教育思想を反映する実践も模索されていた。よって、地域のことばが具体的にどのように示されているのか、教科指導研究の深まりの中で地域のことばの矯正にいかに言及されるのか、新教育思潮に伴い考え方が変化するのかどうかを検討のポイントとする。

総括として、明治 30 年代から大正期の議論を通覧し、その変遷について考察する。

４．研究成果

本研究期間は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、資料調査・そのための出張に際して様々な制約があった。とくに、大学図書館の学外者利用や県庁の公文書保存施設の訪問が難しく、公文書の教育関係簿冊を閲覧し補完的に用いることは断念、長時間の滞在が可能であった岩手県立図書館における調査を優先して進めた。岩手県立図書館には創刊号から最も多くの『岩手学事彙報』が所蔵されていること、本研究の主要資料である『岩手学事彙報』の書誌情報の把握と記事の収集・検討をあわせて行う必要を感じたことから、『岩手学事彙報』の原本調査に重点を置き、『岩手教育』についての分析は次なる課題とした。

結果として、本研究の成果は、大きく以下の 2 点となった。

（1）『岩手学事彙報』の書誌情報の把握

明治 18 年 1 月の創刊号から大正 12 年 2 月の最終号までの内容構成、編輯体制の変遷をたどった。

まずは、内容構成についてである。

刊行当初は、全 20 頁ほどの小冊子で、官令の収録や雑報記事が多く、他雑誌からの転載も目立った。その後、掲載欄の工夫、ページ数の増加等、改良を重ね、徐々に細々とした記事よりも、分量の多い具体的な言説が増えていく。明治 30 年代半ばから大正初期頃には、各号はおおよそ、時事的な事柄にも敏感な社説的巻頭言、科学的知識等の学説、教授論や授業実践教案、文芸作品、県内外の出来事を集めた雑報、各郡の通信からなっていた。大正期には、小学校教員協議会をはじめとする研究会の記録を収録することが重要な位置を占めるようになる。また、終刊が近づくにつれて、体系的な学説や教授論が主体となっていくが、雑感などを含め、様々な言説があった。

記事分析に際して留意したいのは、編輯体制である。

各号の表紙裏や奥付には、「編輯人」と「発行兼印刷人」の記載がある。ただ、実質的な編輯体制の情報は少ない。編輯部による新年の挨拶、記者の異動や逝去の記事、節目の刊行号などでの沿革への言及などに限られる。当時の関係者の回想によると、創刊にあたっては岩手県学務課長の竹内直養や岩手師範学校教諭の田口小作らが関わり、仁王小学校の教員が編輯を支えていたとされる。明治 30 年代後半の編輯局には、県内の小学校長を歴任し方言にも造詣の深かった田鎖直蔵や、公私の学校で中等教育に従事した小本正名の名前が確認できる。明治 41 年 2 月に岩手県教育会の機関誌となり、県立高等女学校長の吉野至らが編輯を担当、吉野退任後には、岩手県師範学校教諭の菅野義之助が活躍し、その後も人員交代があるも岩手県師範学校関係者が中心となっていった。

雑誌の刊行のためには、記者の記事のほか、読者の投稿が重要であった。投稿募集がしばしば掲載されていて、明治 30 年代の募集広告によると、教授の状況や実験はもちろんのこと、各郡の地理歴史風俗方言俚歌など、幅広い内容を求めていたことがわかる。教育会の機関誌となって以降も募集は続き、できるだけ宏量に掲載することを基本としたようである。師範学校教員、郡視学、小学校教員など、様々な立場の教育関係者が原稿を寄せていた。

様々な先行研究において『岩手学事彙報』の言説は引用されてきたが、その編輯体制等については明らかにされていない。手がかりとなる情報が少なく基本的事項ではあるが、本研究で整理することができた。また、上記の書誌情報をふまえた上で、地域の教育の任にあたる現場教員や匿名の論者それぞれの見解に迫り、ことばの教育史を探究する意義を確認し、『岩手史学研究』に論文として発表するに至った。

（２）教育関係者の地域のことばをめぐる議論の分析

まず、本研究の目的である明治末から大正期について検討した（①）。その上で、明治 30 年代から大正期の議論の変遷について考察した（②）。

※正確には、『岩手学事彙報』終刊の大正 12 年 2 月までを対象とした。

①明治末から大正期の「ことばの認識」と「矯正方針・方策」

子どもや教員のことばの困難に関する情報は、「ことばの認識」の背景となったと考えられる。例えば、子どものことばについては、県当局の指示で実施し、明治 41 年に公表された「第二回小学校児童学業成績調査」の結果報告がある。136 の小学校の高等科第 2 学年を対象とした 5 科目の調査結果で、国語科では第一に、発音の混同が表記上に多々あらわれていることについて、「鈴虫」を「しじむし」のように誤謬例が示され、問題視されていた。さらに、綴り方については、児童の思想が整理されず、方言も多いため、通読できないものも少なくないという現実が指摘されているのである。

そもそも教員のことばも課題となっていた。大正元年には、岩手県教育会の主催で伊沢修二を講師として招き、教員向けの発音矯正の講習会が開かれた。参加者の「講習雑感」によると、伊沢は容赦なく徹底して矯正したという。これには苦々しい思いを抱く者も多かったようで、おそらくははっきりと自覚できていない訛音をも正され苦労したものと思われる。

こうした情報と並行して、教員個人による地域のことばの考察や研究が寄せられている。方言に古語との関わりを見出す、音声や語彙におけるアイヌ語との共通項を追究するなど様々であるが、東北のことばは聞き取りにくいとされていること等を理由に、矯正を要すると捉えたものが多い。また、各市郡の教育会の部会等において、発音や方言調査が計画されたり、学校での矯正方法について協議題となったりしていた。議論の経緯の詳細は掲載されていないが、各郡の通信にしばしばこうした事実の記録がある。

「矯正方針・方策」に関しては、主に小学校の国語科（読み方、綴り方、話し方）の教授論、教授談、各種研究会の記録で言及されている。国語科の基本方針として、発音を正し方言を使わないことを非常に明確に主張する言説が目立つ一方で、小学校低学年の教授に際しては、よく配慮して段階的に進める方向を説く記述もみられる。

岩手県では大正 3 年から「小学校教員協議会」が開催された。毎年 1～2 回、教科や領域などテーマを定め、それについて各市郡と師範学校の代表者が公開で発表・質疑を行っていた。地域のことばの矯正への言及が最も多いのは、大正 8 年の「低学年教授」の協議会である。新入学児童との接し方や躾、教科教授などについて女教員 25 名が発表し、「口形略図」を用いた発音矯正、国語読本の語句に準拠した標準語と方言の対照表の作成や掲示といった実践報告もあった。注目すべきは、教員たちが子どもと積極的に接して、そのことばを知ろうとしていることである。

内陸部の岩手郡のある教員は、児童と応答を重ねたところ、その答えが単純で要領を得ないものが多いと感じ、方言に代わる標準語を多く教えたいと、方言矯正の動機を示している。また、岩手郡の別な教員は、綴り方教授の準備として、子どもと問答することを重視している。例えば、学校から児童の家までの道のりを尋ねると、「学校のめえぁのたんぼえて、きやさばすわだて、みす通ほて行くと安庭だ。その一番さぎのえおらほのえだ。（学校の前のたんぼを行つて、葛西橋を渡つて、見石を通ほて行くと安庭です。その一番先の家は私の家ですの意）」というように、児童の談話は「方言まるだし」だが、うちとけて話をよくきき、児童の伝えたいと思う気持ちを引き出したところで書く方向へ導き、不明瞭な箇所をひとつひとつ批評して進むことで、方言でなくても書けるようになるとしていた。

大正 3 年には、「中等学校教授法研究会」も開始となる。当番学校と教科を定め、当該教科の中等学校教員が出席し、実地授業の参観・批評と普段の教授上の経験や疑問について意見交流する会で、開始当初は 1 年に複数回行われた。この研究会においても、国語及漢文科を中心に地域のことばの矯正の実況は繰り返し協議題にのぼっていた。

明治末から大正期の『岩手学事彙報』における地域のことばに関する「記事名リスト」については、学会発表時に画面提示するにとどまり、リストと解説をあわせて公表することを計画中であるが、様々な記事から情報が得られた。記事検討のポイントとした、具体的な地域のことばの実態については、発音の混同や方言が表記にも反映されてしまうという児童の学力調査の情報等を背景としながら、教員による方言語彙の整理や、子どもとの対話の再現などに示されていた。とくに小学校の教授法の研究会では、矯正の方策が発表されていた。標準語を教えることが表現の幅を広げることに通じると考える教員がいたこと、何より、最終的に標準語を使うことを目指す場合にも、その出発点としては子どものことばを大切にしていたことが重要である。なお、新教育思想に関する論説は散見されたが、十分に浸透しないうちに下火になったと皮肉る挿絵等もあり、地域のことばの扱いへの影響や考え方の変化は捉えられなかった。

②明治 30 年代から大正期の議論の変遷

明治 30 年代から大正期の地域のことばをめぐる議論を通覧すると、一も二もなく矯正するというのではなく、試行錯誤する流れは継続しているが、地域のことばの捉え方や実践のあり方には変化が見えた。

岩手県では、明治 30 年代頃から教育関係者が地域のことばについて議論するようになった。岩手県庁から岩手県聯合教育会へ言語調査の諮問が行われた際には、矯正を前提として大々的に調査をすることに対して反対の声も上がっていた。また、とくに郡部の学校での教育実践の困難が大きく、教員は地域のことばの実態をふまえた現実的な対応を考えていた。児童が無理なく学習し「折衷語」つまりは、方言ではない程度のことばを身につけられるような指導の工夫などを行っていたのである。

明治 40 年代から大正期へと時代が進むにつれて、地域のことばの調査や矯正に疑問を示す言説はあまり見られなくなる。児童の学力調査結果の情報等も報じられ、教育実践上、標準語を目指すという傾向が強くなっていく。ただ、まずは子どものことばを受けとめ、子どものことばを土台として実践している様子が窺えた。自己の考えが広く他者に伝わるよう、ひとつひとつのことばを整えていく指導などを提案していたのである。

地域の教育は、ことばを統一するというより、方言主体の実態を出発点としてことばを形作るようであるが、徐々に標準語へと近づく指導傾向になっていくことを明らかにできた。なお、明治 30 年代から大正期の議論の変遷につき、とくに児童のことばの実態が具体的に示された言説を検討し、共編著の地方出版物『岩手の方言と郷土教育資料』に原稿を掲載することが確定している。東北地方において教育上ことばの課題が大きかったことはよく知られているが、教員の見解と変遷については未解明である。その通史解明に向けて分析を進めたことが、本研究の成果である。

今後は、大正末から昭和期の地域のことばの議論の変遷を分析することを展望している。徐々に標準語へと近づく指導が広がると、授業中とそれ以外の時間とで方言と標準語を使い分ける「二重言語状態」も進んでいくものと考えられ、その様子に迫りたい。また、本研究対象時期においては、筆記での学力調査や子どもとの会話によって難があることが確認され、広く他者に伝わるようにすることを重視していたようだが、その後、北方性教育運動などと関わりながら、地域のことばだからこそ表現できることに目を向けていくのかどうかも注目される。

地域教育会雑誌によって、地域の教育思潮や教授論を把握することを継続していく。あわせて、すでに検討しつつある教員の私文書等、資料の可能性を探りながら、ことばの実態と指導について、より多面的に掘り下げていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小島千裕	４．巻 104
２．論文標題 地域の教育雑誌を主要資料としてことばの教育史を探究する意義―明治三十年代の『岩手学事彙報』から―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 岩手史学研究	６．最初と最後の頁 81-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小島千裕
２．発表標題 教育関係者による地域のことばをめぐる議論のはじまり―明治30年代以降の『岩手学事彙報』を中心に―
３．学会等名 岩手大学人文社会科学部宮沢賢治いわて学センター第4回シンポジウム「岩手の方言と郷土教育資料」（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 小島千裕
２．発表標題 教員たちは地域のことばをいかに捉え実践しようとしていたのか―明治末から大正期の『岩手学事彙報』をもとに―
３．学会等名 国語教育史学会第69回例会
４．発表年 2023年

１．発表者名 小島千裕
２．発表標題 地域の教育雑誌を主要資料としてことばの教育史を探究する意義―岩手県立図書館所蔵の『岩手学事彙報』をもとに―
３．学会等名 岩手史学会2021年度大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 岩手県郷土教育資料研究会編（上野善道、大野眞男、小島聡子、小島千裕、竹田晃子　執筆）	４．発行年 2024年
２．出版社 杜陵高速印刷出版部	５．総ページ数 -
３．書名 岩手の方言と郷土教育資料	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関